国の掾久米朝臣広縄、天平二十年を以て、朝集使に付きて京に入る。その事畢りて、天平感宝元年閏五月二十七日、本任に還り至る。よりて長官の館に、詩酒の宴を設けて楽飲す。ここに主人守大伴宿禰家持の作る歌一首　并せて短歌

四一一六番

大君の　任きのまにまに　取り持ちて　任ふる国の　年の内の　事かたね持ち　玉桙の　道に出で立ち　岩根踏み　山越え野行き　都辺に参ゐし我が背を　あらたまの　年行き反り　月重ね　見ぬ日さまねみ恋ふるそら　安くしあらねば　ほととぎす　来鳴く五月の　あやめぐさ　蓬かづらき　酒みづき　遊び和ぐれど　射水川　雪消溢りて　行く水の　いや増しにのみ　鶴が鳴く　奈呉江の菅の　ねもころに　思ひ結ぼれ　嘆きつつ　我が待つ君が　事終はり　帰り罷りて　夏の野の　さ百合の花の　花笑みに　にふぶに笑みて　逢はしたる　今日を始めて　鏡なす　かくし常見む　面変はりせず

反歌二首

四一一七番

去年の秋　相見しまにま　今日見れば　面やめづらし　都方人

四一一八番

かくしても　相見るものを　すくなくも　年月経れば　恋しけれやも